歴史博物館開館 弥生の絵画 倭人の顔 10周年記念特別展 弥生の絵画 倭人の顔

国宝 桜ヶ丘銅鐸(1号、2号、4号、5号)

昭和39年、神戸市灘区桜ヶ丘町から***弥生時代**の中ごろ(2000年前)の*銅鐸14点と*銅戈7点が一度に出土し、大きな話題となりました。このうち、1号、2号、4号、5号と名づけられた銅鐸4点には、生活の様子や、動物、昆虫など様々な絵が描かれていました。これらはその当時を具体的に表していることから、教科書などにも紹介されています。

両面と鐸身(胴部)の上面に絵画がありますが、この面には、右

からカエル、スッポン、イモリ、狩人、カニ、トンボ、シカ3頭、狩人3人が描かれています。狩人の1人は弓を持ち、もう1人はシカの頭に手をかけています。射止めたシカを自慢しているようにも見えます。

銅鐸は、型に溶かした金属を流し込んで作るため、同じ型から作った何点かの「兄弟」の存在が知られています。ちなみに、この桜ヶ丘 1 号銅鐸は、ほかに滋賀県や鳥取県で見つかっている 4 つの兄弟銅鐸が確認されていて、現在では 5 兄弟のうちの「長男」にあたります(将来、さらに「兄」が見つかる可能性もあります)。





桜ヶ丘1号銅鐸(左)と、銅鐸の模様(上)

◆市民招待券◆

2月3日(土)~3月25日(日) の期間中有効

- ●JR東海道本線安城駅から、市内 循環バス歴史博物館行き9分
- ●名鉄西尾線南安城駅から、市内 循環バス歴史博物館行き5分

◆市民招待券◆

2月3日(土)~3月25日(日) の期間中有効

- ●JR東海道本線安城駅から、市内 循環バス歴史博物館行き9分
- 名鉄西尾線南安城駅から、市内 循環バス歴史博物館行き 5 分

用語解説

- *弥生時代:今から2400年前から1700年前ごろまで。日本の多くの地域で稲作が本格的に始まり、金属が使用されるようになり、ムラを統率する首長が生まれました。また、戦争が多く、ムラが防御用の堀で囲まれたり、様々な武器が用いられたりもしました。 *銅鐸:弥生時代の祭りに使われた鐘。初めは鳴らして音を聞く鐘でしたが、時代を経るにつれて装飾が施され、「見るための鐘」に変化していきました。 *銅戈:弥生時代の武器。剣のように両側に刃を持ち、鎌のように柄を付けて用います。柄に差し込む部分に、顔などの絵が描かれることもあります。 *魏素優人伝:正式な名前は、『三国志』のなかの『魏書』烏丸鮮卑東夷伝倭人条といい、紀元280年ごろ、
- *魏志倭人伝:正式な名前は、『三国志』のなかの『魏書』烏丸鮮卑東夷伝倭人条といい、紀元280年ごろ、中国(当時は晋)の陳寿という人により編さんされました。日本では、弥生時代後期から古墳時代前期にあたります。
- *古墳時代: 今から1700年前から1400年前ころまで。 首長の権力が一層増大し、その地位の世襲とともに、 各地に巨大な墓=古墳が作られるようになりました。

一描かれた2000年前の世界一 主な展示品の紹介

楼閣が描かれた土器

平成4年、奈良県田原本町の唐古・鍵遺跡から、楼閣(四方を望観する高層建物)が描かれた、弥生時代中ごろの壺の破片が出土しました。棟先には渦巻状の飾りがつき、ベランダ部分には鳥が描かれ、下にはハシゴもみえます。

「***魏志倭人伝**」には、 邪馬台国の女王・卑弥呼 が住んでいたところにも

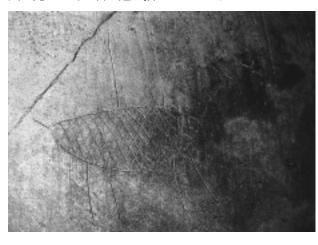
物見やぐらがあったと記されていますが、このような外観だったのでしょうか。

この唐古・鍵遺跡からは、弥生時代の絵が描かれた土器のうち、全国の約半数が出土しています。

矢が刺さった鹿

弥生時代の土器に描かれた絵のうち、最も多いのは鹿で、全体の47%になります。鹿は、不思議な力をもった特別な動物と考えられていたのかもしれません。

大阪府東大阪市の瓜生堂遺跡から出土したこの土器片には、矢が刺さった鹿が描かれています。鹿の背中に突き出た矢の端には、木の葉の形をした矢羽が見えます。 矢の先は、その右に短く描かれています。



鳥の仮面をかぶる戦士



土器に描かれている弥生時代のシャーマン (「いのり」や「まじない」をする人) は、 翼のような服を着ていたり、くちばしや羽の ついた仮面をかぶっていたりします。鳥を神のように考えていたのでしょう。

佐賀県東脊振村の瀬ノ尾遺跡から出土した この土器片に描かれた人物は、鳥のような仮 面をかぶるとともに、手に盾をもっています。 戦士の中でも、シャーマンとしての役割をも った人だったのでしょうか。

人面文土器

今回の展示では、人面文土器を中心として、原始古代の顔が描かれた資料を集めた「顔のメッセージコレクション」全44点を一挙に公開します。



人面文土器が作られた弥生時代の終りころから*古墳時代の終りころから*古墳時代のはじめにかけて、全国的に入墨のある人の顔を文様のように描いた土器がみられます。特に東海地方から出土する顔に共通性が高く、数も多いことから、この地域がひとつの文化的つながりで結ばれていたのかもしれません。



